

R Talk Session

Theme

THINK “SIGOTABA”

魅力的な“シゴトバ”って何だろう？

Interlocutor

HIROSHI NAKASHIMA

ADDALPHA INC.

中島 洋史氏

1975年生まれ。福岡県春日市出身。株式会社アドアルファ代表取締役。福岡を拠点とし全国でオフィスを専門に空間企画、設計デザインをおこなう。



KATSUMI YOSHIHARA

space R design Ltd. / YOSHIHARA JUTAKU Ltd.

吉原 勝己

1961年福岡市清川生まれ。株式会社スペースRデザインと吉原住宅有限公司の代表取締役を兼任。「ビンテージビル」という概念を打ち立て、福岡を拠点に経年賃貸ビル再生をおこなう。

働き方とともに変わる、オフィスへのニーズ



中島さん(左)と吉原住宅 吉原(右)。対談は辻ノ堂ラウンジの眺めの良い“ラウンジ”で行われた。

吉原 中島さんはオフィスデザイン専門の会社を運営なさっています。吉原住宅も、もともと天神パークビルというオフィスの運営から始まった会社です。当時のオフィスビルといえば、野球でいうと一軍選手しか借りられないという雰囲気がありましたよね。

中島 それに、昔のオフィスの空間って無機質で画一的だったでしょう。僕は若い頃から楽しく働きたいという想いが強かったので、そうした空間には何の面白みも感じなかった。それに無機質な空間でただ働くだけでは、やはり働く人にストレスがたまる。これはおかし

いだろう、と。オフィスの在り方を見つめ直して、今の会社を創業したのが2001年。僕が26歳の時です。

吉原 私が最初に山王マンションで賃貸住宅のリノベーション企画を模索し始めたのが2001年ですから、时期的にリンクしていますね。リノベーションという発想が浸透し始めた頃から、世の中の仕事場への意識も加速度をつけて変化していった気がします。

中島 ええ。ちょうど終身雇用という考え方が崩壊し、自分が好きなことを好きなスタイルで仕事にしたい、と考える若者が増えた時期でもありますよね。そしてネット

環境の充実。この2つの要素が浸透して、日本のオフィス観は大きく変わりました。**吉原** 働き方が多様化する一方で行き詰っているのが、現在のワークスペースの形態です。福岡で起業や活動の場を考えた時、一般のオフィスビルを中心に、レンタルオフィス・シェアオフィス・コワーキング・SOHOなど生まれましたが、実際は提供されている数も少なく、選択肢は多くはないのが現実です。

中島 ところがオフィスビルに入るには資金が足りなかったり、社会的な信用性がまだ薄かったりして実現が難しい。従来のオフィスビルの区画も少人数で借りるには大き過ぎますからね。



吉原 そうなんです。福岡の古き良きビルの再生企画をおこなう中、働く場所のバリエーションが少ないことに気づきました。

中島 冷泉荘にも様々な職種の方が入居して、それぞれのスタイルで仕事を



なさっていますね。

吉原 そうなんです。冷泉荘の方向性を模索しながら仲間を募った時、仕事場をもっと自由に考えて良い事を、入居者さんたちに教えてもらいました。これは入居者さんからの要望に学んだ新しいニーズですね。

中島 冷泉荘の魅力はそこに入っている人たちの“顔”が見えるところ。とにかく新鮮でした。

吉原 これまではオフィスの名前がブランドでしたが、冷泉荘は入居者1人ひとりが“顔”であり、冷泉荘という“ブランド”を作ってくださっている。あのビルに入ると面白そうだ、そんな前向きな気持ちがスイッチになって、ビル全体のエネルギーが盛り上がる。仕事場はこうあるべきだと思いました。そこで、私たちはこれまで創り運営してきた、“先端であり、ユニークであり、開かれた”ワークプレイスを「シゴトバ」と呼ぶことにしました。

「辻ノ堂ラウンジ」に見る、これからの“シゴトバ”の役割



吉原 そのうえで私たちは、福岡のまちの特性に合わせたワークプレイスのバリエーションを増やす必要性を感じ、そこで生まれたのが、「辻ノ堂ラウンジ」の構想です。

中島 1フロアにコンパクトなオフィススペースが3室と、入居者が共同で使えるラウンジもある。このラウンジが魅力です。

吉原 都心の特別なオフィス空間を自由な感覚で使える。そして、ラウンジに

よって入居者さん同志がつながり、それが社会とのつながりまで生みだせるよう。若い起業家や全国を渡り歩く企業家にもチャレンジできる経済性と、カフェの持つ社会性をミックスできればと思いました。

中島 隣のお寺の庭がまるでオフィスの庭のよう。都心部に古い街並みが残るのは、福岡ならではのですね。

吉原 このビルがある場所はその昔、様々な文化が流入する博多の入口「辻

ノ堂門」があったエリアです。だから辻ノ堂ラウンジのテーマも「ひと、まち、文化をつなぐクロスラウンジ」としました。

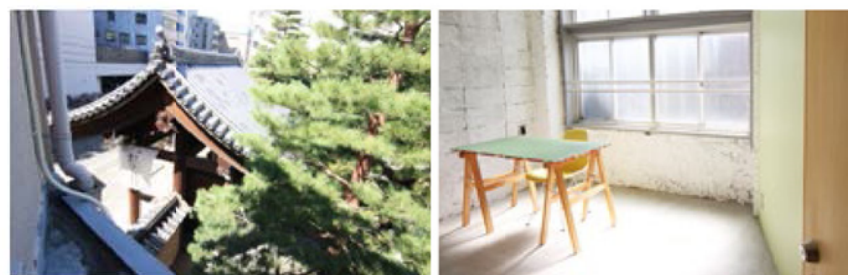
中島 なるほど。僕は不動産にはまちを変える大きな力があると思っています。辻ノ堂ラウンジも、福岡に新しい仕事場の価値観をもたらそうです。

吉原 辻ノ堂ラウンジは、福岡にあるべき“シゴトバ”はこれだ!という、私たちが出したひとつの回答。たとえば東京の

人が福岡に拠点を置くとしたらどこがいいか、ここに来ればビジネスネットワークを見つけることができる。辻ノ堂ラウンジをはじめとした“シゴトバ”はそういう人材の求心と情報発信の場でもありたいです。

中島 スペースRデザインが手掛ける“シゴトバ”って、仕事をする空間としての「場」だけでなく、人と人、人とまち、人と文化が出会う「場」でもある。だから、まちの在り方を意識している人々が集まり、ユニークなムーブメントが生まれるんじゃないかな。

吉原 はい。私たちが手掛ける“シゴトバ”が古き良きビルを楽しみ、人との出会いを楽しむ「場」となってくれたら、こんなに嬉しいことはありません。今日はありがとうございました。



辻ノ堂ラウンジの隣は歴史ある承天寺。独立したオフィスの内装は好きなようにアレンジすることができる。